

心理学に対する専攻動機と期待に関する調査研究

The Expectation and Motivation of Studying Psychology

谷口（藤本）麻起子・金綱知征*

Taniguchi (Fujimoto) Makiko and Kanetsuna Tomoyuki

要 約

本研究の目的は、「1：専攻志望動機と専攻への期待について量的な検証が可能な尺度を作成すること」、「2：非心理学専攻学生との比較検討を行い、心理学専攻学生の専攻志望動機と専攻への期待について明らかにすること」の2つであった。検討の結果、まず専攻志望動機と専攻への期待について、一定の信頼性と妥当性が確認された尺度が作成された。

また専攻志望動機については、「自他経験・問題解決」得点と「専門性獲得」因子が心理学専攻学生に有意に高いという結果が得られた。さらに心理学への期待についても、「自他理解・問題解決」得点と「専門性獲得」得点が心理学専攻学生に有意に高いという結果であった。これらのことから、心理学専攻学生は自他の否定的経験が契機となり、心理学を学ぶことで自己の問題解決を試みようとする、そして他者の問題解決のための専門的スキルを獲得しようとするという筆者らの仮説がより支持されたと考えられた。

Key Words：心理学，専攻志望動機，専攻への期待

1. 問題と目的

筆者らは心理学専攻の学部専任教員という立場上、学生がなぜ心理学を学びたいと思うのかということをお問わざるを得ない。その理由は1つには、学生のニーズに合わせた心理学教育をある程度行いたいということによる。ある程度というのは、心理学が万能ではないためであり、また心理学のことをよくは知らない学生のニーズに合わせて心理学を変形するのではなく、心理学の本質を守りながら学生のニーズに合わせた教育を行いたいと考えているからである。工藤・鈴木・小林（2004）は、心理学を学ぶ前の人文学部1回生に心理学の勉強への期待を尋ねたところ、「人間に対する理解が深まる」、「悩みを抱えた人の相談にのれるようになる」と答えたものが52～72%いることを見出した。また「自分の悩みをうまく解決できるようになる」、「『本当の自分』をみつけることができる」との回答が20%前後あったことも報告している。しかし心理学を学べば人間理解が深まり、悩みを解決できるようになるというのは、真実とは言い難い。心理学というのは頭では理解しやすいものであるが、実行するには大変難しい学問である。一例を挙げれば、「話を聴く」ということがカウンセリングで大事だということはすんなりと受け入れられるが、これを実践するとなると大変難しい。学生達がもし悩みの解決ということを期待して心理学を専攻するならば、統計学や基礎実験がカリキュラムに組み込まれていることに違和感をもつと推測

*金綱知征所属：甲子園大学心理学部

されるため、そうした科目が含まれている理由を、学生が納得し得るかたちで説明する必要も出てくるだろう。したがって学生が何を思って心理学を学ぼうとするのかを把握することは重要である。

理由の2つ目は、「大学で心理学を学ぶこと＝心理療法の受けられること」と勘違いされているのではないと思われるからである。心理学の専門家ならば心についての理解が深いので、学生にきめ細やかなケアをしてくれると誤解されているように思うことは多々ある。不登校や発達障害を呈する学生「なので」心理学の学部へ、という発想に何度か筆者らは出会ったことがある。不登校にしても発達障害にしても、確かに専門的な心のアプローチが効果的な場合もあるが、心理学の学部に限らずどこの学部においてもこうした学生の十分な受け入れができてしかるべきである。また筆者の一人は臨床心理士であるが、教員と臨床心理士というのは両立の難しい仕事である（谷口，2012）。たとえ臨床心理士であっても、教員という立場にありながら同時に臨床心理学の専門家としてのアプローチができるかといえば、実はそうではないところもある。

いずれにせよこれらの場合、学生が心理学を通じて主体的に自分のことを考えるという姿勢にはなり難く、教育に工夫が必要となってくる。そのためには学生が何を求めて心理学を専攻するのか、心理学に何を期待しているのかについて明らかにすることが必要である。

3点目はこれまでも述べてきたことであるが、心理学を専攻する学生、特に臨床心理学を学びたかったり臨床心理士を志望したりする学生が、志望動機として“自分に否定的経験がある”ことを挙げる者が多いという筆者らの経験や、先行研究による指摘（塩尻・福田，2005；上野，2010）による。経験者であるがゆえに気持ちがわかるというのが彼らの発想である。ピアカウンセリングのように、確かに経験を共有するがゆえの強みというはあるし、経験者が援助者になることによる効果も挙げられている（村田・中村，2012）。とはいえ基本的には河合（2000）が述べるように、自分に経験があるだけで臨床心理士になることは問題であり、他者と同じ経験をするということも不可能である。経験があることは、たいてい逆転移の問題を深めるだけなのである。そもそも治療を終えたクライアントがセラピストになるという話も直接には聞かない。なぜわざわざ経験に触れ続けようとするのか、ということが疑問である。ここで筆者らは、実は否定的経験は未解決（ここでいう解決というのは主観的な解決のことを指す）であるため、心理学を学ぶことで、あるいは援助者になることで未解決の問題を解決しようとしているのではないかという仮説を立てた。自身の問題を考えるために心理学を選択することも臨床心理士を目指すことも、それ自体は決して悪いことではなく、心理学が心の問題解決に役立つことは教員としてうれしいことでもある。とはいえ心理学を学ぶことに心理療法の効果を期待されても、果たして心理学に何ができるのかという思いがあれば、心理学を学ぶより心理療法そのものを受ければよいのではないかと思うこともある。

ここまで疑問点を3つ述べたが、集約すれば「否定的経験の解決のために心理学を専攻するのではないか」、「否定的経験の解決のために臨床心理士を目指す場合、問題は起こらないのか」、「否定的経験の解決のために心理学は何をなし得るのか」ということである。これらは非常に大きなテーマであるが、手始めとして筆者らは専攻志望動機と専攻への期待という切り口から、い

くつか予備研究を行った。そこでは心理学専攻学生の専攻志望動機として「否定的経験」が重要な要素であり、心理学を学ぶことで結果的に自己の問題を解決しようとする（金綱・谷口，2011）、心理学を学ぶことの一般的な期待として「自他の理解と問題解決があること」（谷口（藤本）・金綱，2012）が明らかとなった。

つまり心理学に自他の問題解決を期待するのは一般的なことであるが、専攻を選択するに当たり、心理学専攻の学生は自己の否定的経験が契機となり、心理学を学ぶことで結果的に問題を解決しているという様相が推測された。しかしこれまでの調査は質的研究であったり、心理学専攻学生のみを対象とするものであったりしたため、これらの特徴が他の専攻学生にも同様にみられるものなのか、あるいは心理学専攻学生に特有のものなのかは不明である。

そこで本研究では非心理学専攻学生との比較により、否定的経験の解決という動機あるいは期待が、心理学専攻学生に特有のものであるかを検討することとした。また専攻動機と期待を検討するに当たり、どの専攻学生も用いることのできる量的尺度というものが見当たらないため、本研究でその尺度作成を試みることにした。以上に述べたことから、本研究の目的は次の2点である。

目的1：心理学専攻と、非心理学専攻の両学生に共通に用いることができる、専攻志望動機と専攻への期待について量的な検証が可能な尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検証すること。

目的2：作成した尺度を用いて、非心理学専攻学生との比較検討を行い、心理学専攻学生の専攻志望動機と専攻への期待について明らかにすること。

2. 方法

2.1 調査協力者

関西圏私立四年制大学心理学系学部・学科在籍の学生100名（男性48名，女性52名）、及び非心理学系学部・学科在籍の学生80名（男性45名，女性35名）。

なお本研究は予備的検討として実施されているため、目的1と2について同一サンプルで検証を行った。

2.2 調査方法

無記名自記式質問紙を用いて調査を行った。質問紙は2種類からなった。1つは専攻を志望するに至った動機について尋ねるもので（以下、「動機質問紙」と称する）、全85項目からなった。これは金綱・谷口（2011）で作成した心理学専攻学生の志望動機を尋ねる質問紙を元に、非心理学専攻学生の志望動機も尋ねられ、かつ量的検討が可能となるように改訂したものである。

もう1つは専攻に対する期待について尋ねるものであった（以下、「期待質問紙」と称する）。これは谷口（藤本）・金綱（2012）で作成した心理学専攻学生の期待を尋ねる質問紙を元に、非心理学専攻学生の期待も併せて尋ねられるよう改訂したもので、全44項目からなった。

これらはそれぞれ「1. 全くあてはまらない」～「5. とても当てはまる」の5件法で回答を求めるものであった。

2.3 手続き

調査は筆者の所属機関及び調査協力者の所属機関で行われた。筆者所属機関における質問紙配布及び回収は授業時間内に質問紙を配布し、その場で回答させ回収した。また調査協力者所属機関における配布及び回収については、協力者が質問紙配布及び回収を授業時間内に行い、後日筆者が受け取りに行った。調査時期は2013年1月であった。

3. 結果

3.1 尺度作成のための結果の整理、及び結果

回収された180名の質問紙を全て分析対象とした。まず動機質問紙全85項目、及び期待質問紙全44項目の合計得点を基準として、回答者を上位・中位・下位の3群に分けた。次に各項目における上位群と下位群の得点を用いてGP分析を行った。

その結果、動機質問紙については「楽しそうだったから」と「希望する学部・学科・研究科にはいけなかったから」の2項目については有意差が認められず、削除した。残り83項目と期待質問紙の全44項目については有意差が認められたため、弁別力があるものとみなして残した。

次に動機質問紙83項目、期待質問紙44項目を用いて、最尤法プロマックス回転による因子分析を行った(表1, 2)。

動機質問紙については因子負荷量が、40未満であった30項目が削除され、3因子が抽出された。第1因子は26項目からなり、「不登校・いじめの経験について考えたい」、「身近な人のいじめ加害経験」といった、過去経験や問題の解決を目指すと考えられる動機が含まれていたため、「自他経験・問題解決」因子と名付けた。第2因子は17項目あり、「より安定した仕事につける」、「遊びたかった」といった現実的な欲求が動機と考えられる項目があったため、「現実的欲求充足」因子とした。第3因子は「専門的技術の獲得」、「専門的知識が身につく」といった専門性を得るといふ動機と考えられる10項目からなり、「専門性獲得」因子と名付けた。

これら3因子のCronbachの α 係数はそれぞれ.954, .882, .855であり、内的一貫性についての信頼性は十分あるものと考えられた。

続いて期待質問紙については10項目が削除され、4因子が抽出された。第1因子は「悩みを抱えた人の相談にのれるようになる」、「本当の自分をみつけられる」といった、自他の理解や過去の問題解決への期待と考えられる12項目からなり、「自他理解・問題解決」と命名された。第2因子も12項目からなり、「情報収集能力が身につく」、「一般教養が身につく」といった、専門性とは異なるスキルや知識を得る期待と考えられる項目が含まれているため、「一般的スキル獲得」因子と名付けた。第3因子は6項目あり、「専門的資格の取得」、「専門的技術が身につく」といった専門性を得るといふ期待と考えられたため、「専門性獲得」因子とした。最後に第4因子は4項目であったが、「科学の発展に期待できる」、「文化の発展に貢献できる」といった項目が含まれていたため、「社会貢献」因子と名付けた。

これら4因子のCronbachの α 係数はそれぞれ.921, .914, .856, .782であり、内的一貫性についての信頼性は十分あるものと考えられた。

表1 専攻志望動機質問紙 因子分析結果

第一因子 自他経験・ 問題解決	不登校・いじめの経験について考 えたい	.893	-.198	.049
	身近な人のいじめ加害経験	.770	.052	-.083
	不登校・いじめ経験が生かせる	.770	-.213	.096
	不登校・いじめ経験の問題の解決	.769	-.152	.172
	病気・怪我・障害等の経験の問題 の解決	.761	-.020	-.060
	自身のいじめ加害経験	.751	.054	-.104
	身近な人の不登校経験	.747	-.097	-.023
	病気・怪我・障害等の経験が生か せる	.732	-.083	.013
	身近な人のいじめ被害経験	.731	-.129	.125
	病気・怪我・障害等の経験につい て考えたかった	.730	-.051	.050
	自身のいじめ被害経験	.707	.007	.053
	自身の病気・怪我・事故	.688	.025	.000
	身近な人のもつ障害	.682	.028	-.135
	身近な人の病気・怪我・事故	.660	-.125	-.004
	自身のもつ障害	.635	-.004	-.038
	自身の心理士への相談経験による 心理職への反発	.632	.308	-.190
	自身の不登校経験	.625	-.095	-.061
	身近な人の心理士への相談経験に よる心理職への憧れ	.570	.236	.062
	身近な人の悩み／問題を解決した い	.561	-.243	.374
	自身の心理士への相談経験による 心理職への憧れ	.552	.168	.064
	自身のコンプレックスの解消	.545	.111	.113
	先生とうまくいかなかった	.530	.295	-.034
	人の相談にのってほめられた経験	.524	.086	.195
	身近な人の心理士への相談経験に よる心理職への反発	.515	.311	-.178
	身近な人に憧れて	.512	.093	-.046
	社会の問題を解決したい	.496	.107	.289

第二因子 現実的欲求 充足	見栄／世間体	-.052	.663	.000
	より安定した仕事につける	-.166	.633	.168
	より高額な給与の仕事につけるから	-.058	.624	.087
	家族からの勧め	.157	.614	-.193
	就職に有利／就職率	-.170	.604	.148
	保護者に強制された	.190	.593	-.273
	周囲の人の進学	-.129	.560	.123
	大卒資格	-.167	.547	.151
	友人を見つけたかった	.158	.507	.005
	高卒が嫌	-.196	.505	.092
	多くの人と知り合いたい	-.027	.503	.308
	より高い地位を得る	.060	.500	.072
	遊びたかった	.093	.482	-.257
	他にやりたいことがなかった	.015	.475	-.130
	恋人を見つけない	.221	.474	-.034
	開放感を味わいたい	.239	.458	-.010
	社会に出たくない	-.056	.425	.187
第三因子 専門性 獲得	専門的技術の獲得	.020	.140	.718
	専門的知識が身につく	-.053	.080	.687
	広く教養を身につけたい	-.089	.184	.683
	面白そう	-.154	-.094	.657
	自分に向いている	.067	.013	.590
	知的好奇心が満たされる	.036	.066	.562
	受講したコースがあった	.068	-.175	.552
	社会の役に立ちたい／社会貢献	.197	-.002	.510
	受講したい授業があった	.116	.001	.483
	専門的な資格の取得	.110	.169	.438

表2 専攻への期待質問紙 因子分析結果

第一因子 自他理解・ 問題解決	悩みを抱えた人の相談にのれるようになる	.858	-.135	.051	.000
	本当の自分をみつけられる	.840	.028	-.166	.145
	他者の性格が分かるようになる	.770	.070	.007	-.040
	他者を助けることができるようになる	.682	-.229	.154	.064
	自身の悩みが解決される	.609	-.042	.001	.267
	人づきあいがうまくなる	.607	.189	.063	.014
	自身のコンプレックスが解消される	.582	-.053	-.048	.348
	子育てがうまくなる	.575	-.022	-.007	.289
	過去の嫌な経験を乗り越えられる	.561	-.272	.088	.283
	他者の考えが分かるようになる	.542	.319	.063	-.322
	人間一般に対する理解が深まる	.515	.118	.179	.032
新たな生き方が見つかる	.472	.061	.094	.094	
第二因子 一般スキル 獲得	情報収集能力が身につく	-.144	.804	.038	-.044
	一般教養が身につく	-.071	.754	.077	.030
	プレゼンテーション能力が身につく	-.179	.744	-.125	.144
	社会や組織でうまくやっていけるようになる	.323	.730	-.081	-.123
	ITスキルが身につく	-.478	.718	.153	.318
	社会的スキルが身につく	.141	.674	.118	-.153
	一般職への就職	.035	.624	-.248	.041
	礼儀作法／マナーが身につく	.068	.610	.039	.174
	将来の進路が見つかる	.006	.571	.055	.101
	良い友人と出会える	.214	.542	-.199	.168
	知的能力を育むことができる	.112	.496	.336	-.144
社会の仕組みが分かるようになる	.106	.474	.020	.358	
第三因子 専門性獲得	専門的資格の取得	-.045	-.164	.789	.069
	専門的技術が身につく	.043	-.076	.774	.014
	専門的知識が身につく	.070	.074	.686	-.080
	専門職への就職	-.013	-.005	.660	.115
	学習法・記憶法を学ぶ	.079	.056	.615	.044
	知的好奇心が満たされる	.222	-.055	.521	-.049
第四因子 社会貢献	科学の発展に貢献できる	.128	-.009	.164	.555
	文化の発展に貢献できる	.175	.141	.014	.536
	恋人と出会える	.165	.193	-.181	.503
	社会の問題が解決できるようになる	.141	.169	.169	.502

3.2 専攻志望動機と専攻への期待の相関分析

続いて専攻動機と専攻への期待との関連を検証するため、相関分析を行った(表3)。表では専攻動機の因子間、及び期待因子間における相関分析の結果も示しているが、ここでは動機と期待の関係についてのみ考察する。

動機質問紙の「自他経験・問題解決」因子は、期待質問紙の「自他理解・問題解決」因子と強い正の相関関係がみられた($r=.542$)。また「専門性獲得」と「社会貢献」については中程度の正の相関関係がみられた(それぞれ $r=.321$, $r=.377$)。

動機の「現実的欲求充足」については期待の「自他理解・問題解決」($r=.216$)、「一般的スキル獲得」($r=.370$)、「社会貢献」($r=.383$)の3因子と中程度の正の相関がみられた。

次に動機の「専門性獲得」は期待の4因子と全て有意な正の相関がみられ、特に「自他理解・問題解決」($r=.503$)と「専門性獲得」($r=.621$)についてはかなり強い正の相関関係がみられた。

表3 専攻志望動機と期待の相関分析結果

	自他経験 問題解決	現実的 欲求充足	専門性 獲得	自他理解 問題解決	一般 スキル 獲得	専門性 獲得	社会貢献
自他経験 問題解決	1						
現実的 欲求充足	.187**	1					
専門性 獲得	.416**	.241**	1				
自他理解 問題解決	.542**	.216**	.503**	1			
一般 スキル 獲得	.054	.370**	.378**	.551**	1		
専門性 獲得	.321**	.054	.621**	.622**	.488**	1	
社会貢献	.377**	.383**	.346**	.623**	.578**	.441**	1

3.3 動機と期待の比較について

心理学専攻学生の専攻動機、及び専攻への期待に関する特徴を明らかにするために、心理学専攻学生と非心理学専攻学生を独立変数とし、動機／期待の各因子得点を従属変数とした t 検定を実施した。

まず専攻志望動機については、「自他経験・問題解決」得点と「専門性獲得」得点について、心理学専攻学生が非心理専攻学生より有意に高い値を示した ($t=4.92, <.001$, $t=2.95, <.001$)。一方「現実的欲求充足」得点については、非心理学専攻学生が心理学専攻学生よりも有意に高い値であった ($t=3.74, <.001$)。

また専攻への期待については、「自他理解・問題解決」得点と「専門性獲得」得点について、心理学専攻学生は非心理学専攻学生よりも有意に高い値を示した ($t=4.97, <.001, t=5.13, <.001$)。一方、「一般的スキル獲得」得点は非心理学専攻学生の方が自意に高かった ($t=2.03, <.05$)。最後に「社会貢献」得点については、有意な差はみられなかった ($t=.497, n.s.$)。

4. 考察

4.1 尺度作成について

本研究の目的は第1に、心理学専攻と非心理学専攻学生に共通して用いることができる、専攻志望動機と専攻への期待について量的な検討が可能な尺度を作成することであった。

この目的については、項目数に比し協力者数が少ないという問題や各因子の項目数のばらつきが大きという問題はあるものの、信頼性と妥当性が一定程度確認された尺度を作成することができた。

動機と期待の両方に共通して抽出されたのが「専門性獲得」因子であった。動機の「自他経験・問題解決」と期待の「自他理解・問題解決」も名前は異なるが、ほぼ同じ内容とみなすことができよう。筆者らは自他経験・問題解決は心理学専攻特有の動機として着目してきたが、自他理解・問題解決のために専門性を獲得するということは、心理学に限らず大学で学ぶ上での大きな基盤となっていると考えられる。

その一方で「現実的欲求充足」のように、大学での学びとは直接つながらない要素が動機として抽出されたことも興味深い。進学目的は多様化していると言われているが、この結果はそれを裏付けるものと考えられよう。しかし期待については独自に「一般的スキル獲得」と「社会貢献」が抽出された。これらのことから専攻の中身がよくわからないまま専攻を選んだものの、大学で何かを学べば社会に通じるようなスキルを獲得し、社会に貢献することができるという期待されているというケースがあることが推測される。

4.2 相関分析について

強い正の相関がみられたものに注目すると、動機の「自他経験・問題解決」と期待の「自他理解・問題解決」、そして動機の「専門性獲得」と期待の「専門性獲得」の組み合わせが該当した。

これらは異なる尺度から抽出された因子とはいえ、内容的に非常に近いと考えられる因子であるため、正の相関が高いということは当然のこのように思えるかもしれない。筆者らは過去の経験を動機とすることと、その解決を心理学に期待することとは別の問題として検討してきたが（谷口（藤本）・金綱，2012）、動機と期待というのは強い相関関係にあるということが示された。この結果から動機と期待については別々に考えるのではなく、どちらか一方に絞って検討することで、他方もある程度同時に検討が可能であるという指針が示されたと考えられる。

次に強い正の相関がみられたものとして、動機の「専門性獲得」と期待の「自我理解・問題解決」の組み合わせが挙げられた。つまり専門性獲得の動機が高ければ（低ければ）、自我理解・問題解決の期待が高くなる（低くなる）ということである。ところが動機と期待をひっくり返した、自我経験・問題解決の動機と専門性獲得の期待の間でみられた正の相関は、それほど強くはなかった。また相関係数の大きさの比較から、専門性獲得を動機とする方が、自我経験と問題解決を動機とする場合よりも、自我理解と問題解決への期待が大きくなることもわかった。

つまり専門性を獲得することを動機としている場合は、自我理解と問題解決、専門性の獲得の両方を専攻に期待することになるが、自我理解と問題解決を動機としている場合は、自我理解と問題解決を期待する程度は比較的大きいが、専門性の獲得への期待は相対的に小さいと言える。

これらの結果は、自他の過去の問題を心理学によって解決しようとしているという筆者らの仮説を支持すると考えられる。さらに過去の問題解決と専門家になるということが区別されているのかどうかという問題については、専門性を獲得するという動機と自我理解・問題解決への期待の相関の高さから、区別されていないと考えられる。しかしこれに比べて自我経験・問題解決の動機と専門性獲得の期待との正の相関が弱かったということから、自分の問題が前面に出る場合、専門家となることは問題解決の二の次と意識されているのではないかとと思われる。

学部生にとって「専門家」というのがどのようにイメージされているかは不明であるが、筆者がみる限り、学部生にとっての「専門家」というのは対象と自身が切り離されているように思われる。臨床心理学でいえば、悩みを抱えているクライアントにセラピストは影響を与えるが、セラピスト自身については問われていないように思われるのである。専門家を目指して自分自身のことを不問に付しながら、実は自分自身の問題解決を期待しているということであれば、セラピーは逆転移の問題で困難になることが予想される。これらの結果は逆転移の現象を考える上でも大変示唆深いものだと考えられる。

4.3 専攻動機と専攻への期待について

本研究の第2の目的は、心理学専攻学生の専攻志望動機及び専攻への期待を、非心理学専攻学生との比較によって明らかにすることであった。

その結果、まず専攻志望動機については「自我経験・問題解決」得点と「専門性獲得」得点が心理学専攻学生に有意に高かった。このことから、心理学専攻学生は自他の否定的経験が契機となり、心理学を学ぶことで自己が抱える問題の解決を試みようとする、そして他者が抱える

問題の解決のための専門的スキルを獲得しようとするという筆者らの仮説がより一層支持されたと考えられる。

その一方で「現実的欲求充足」という、学問とは直接つながらない因子得点については、非心理学専攻学生の方が有意に高かった。この結果もあわせて考えると、心理学専攻学生はより「心理学」を専門的に学び、自身が生きる上で役立てたいという、姿勢があることがうかがわれる。ただしこれが単なる資格取得を目的としているのか、専門的に学び、考え続けたいという姿勢の現れなのかについては、今後さらなる検討が必要であろう。

次に専攻への期待については、「自他理解・問題解決」と「専門性獲得」得点について、心理学専攻学生は非心理学専攻学生より有意に高いという結果であった。自他理解や問題解決については心理学への一般的な期待であり（谷口（藤本）・金綱，2012）、「自他理解・問題解決」については、心理学への期待の一般的な特徴を反映している可能性もある。しかし動機においても心理学専攻学生が有意に高い内容であったことを考えると、動機と期待がぶれていないという点において、より心理学専攻学生が「自他理解・問題解決」と「専門性獲得」に強い志向をもっているとも言える。

一方「一般的スキル獲得」得点は、非心理学専攻学生が有意に高かった。プレゼンテーション能力、ITスキル、一般教養などを含む一般的スキルについてはどの専攻においても学ばれるものと思われるが、非心理学専攻学生はこれらを学ぶ期待がより高いことがわかった。「自他理解・問題解決」と「専門性獲得」得点が心理学専攻学生において高かったこともふまえると、心理学専攻学生は一般的なスキルではなく、より心理学の専門的な側面への期待が高いと考えられる。最後に「社会貢献」得点については、心理学専攻学生と非心理学専攻学生との間に有意差は認められなかった。社会貢献というのは特定の専攻に関わらず、学生が大学に求める一般的な期待といえるだろう。またこれらは従来高等教育の役割ともいえるものであるが、現代の大学生もやはり高等教育にこれらを期待するというのも興味深い。近年大学は資格取得推進と専門特化の傾向があるが、学生は自分のキャリアアップのための資格取得ではなく社会貢献を期待していることを、大学は今一度考える必要があるものと思われる。

4.4 まとめと今後の課題について

本研究から、心理学専攻学生が自身の否定的経験の解決のために心理学を専攻するのではないかという筆者らの仮説がさらに裏付けられた。また、自分の問題の解決と他者のそれとが区別されていないということも明らかとなった。

否定的経験の解決のために心理学を専攻するというつながりは、自然でかつ明快なものに思えるが、珍しいものとみることも可能である。現代は心に関わる問題についての知識や理解が広まってきているとはいえ、心による解決が必ずしも目指されているわけでもないように思う。例えば不妊という問題は医療技術の発展や法律の整備によって不妊であった人が妊娠したり子をもったりすることが可能となり、技術や法律のない頃に比べれば解決可能と考えられる問題となって

きている。しかしその一方で「子どもがもてない私」や「子どもがもてない私の人生」について考え、心理的に解決していくということはその分なくなってきたと思われる。もちろん直接的な解決がなされることは喜ばしいことであり、心理的な解決の方が素晴らしいということでもない。しかしいわゆる否定的経験の解決として心理的な解決が選ばれるとは限らない問題は、他にもたくさんある。

今回の調査では具体的な経験の内容については尋ねなかったが、心理学による解決を求めているということは、経験を心理的な問題と捉えており、心理的な関わりによって解決されうるのであると捉えられているのではないかと推測される。心理学専攻学生以外でも否定的経験を有する者がいるはずであるにもかかわらず、心理学を専攻する者と専攻しない者がいる理由として、体験をどのような問題であると捉えているか、何によって解決されるものと捉えているかという、認知の違いがあるのではないかと考えられる。この点については今後の検討課題としたい。

次に、心理学によって自他理解や問題解決が可能なのかどうかという点について、若干の考察を行いたい。

筆者の1人が担当している科目として「人間発達論」というものがある。これらは人の発達の特徴や発達における心身の課題を、臨床心理学の理論をベースに概説していくものである。また「臨床心理学」の授業では臨床心理学の基礎理論を概説し、様々な問題について心理学的にどのように捉えられるかについて解説している。これらの授業の感想には、よく「自分の～という問題は、今日の授業を聞いて、…の問題だというのがよくわかりました」、「自分の経験上、先生が話された通りだと思います」ということが書かれ、臨床心理学的な視点で自分の経験を捉えてみるという体験がなされることがある。しかしおそらくそのことだけで問題が解決するということはないだろう。例えば今まで不登校の問題は学校のせいだと思っていたという人が、自分の心の問題でもあったのだと気づいた場合、問題は解決するのではなく、むしろそこから解決に向けた問題への取り組みがスタートすると言える。つまり心理学自体は問題解決のきっかけにはなるが、実際に解決をしようとするれば、そこから主体的に自分の問題を考え続けるということが必要になると思われる。もし心理学教育を通じて問題を解決するというニーズに応えようとするならば、心理学を通じて主体的に考え続ける姿勢を養うということも含まなければならない。そもそも心理学がどのような内的変化をもたらすのか、また心理学教育をどのように工夫することで主体的に問題に取り組む姿勢を養うことができるのか、これらの点についても今後の課題としたい。

文 献

- 金網知征・谷口麻起子（2011）過去の否定的経験と大学／大学院教育に関する調査研究
甲子園大学紀要 第38号 125-136.
- 河合俊雄（2000）心理臨床の理論 岩波書店.
- 工藤与志文・鈴木健太郎・小林好和（2004）大学生の心理学に関する「素朴概念」
—本学人文学部生を対象にして— 札幌学院大学人文学会紀要, 76, 1-26.
- 村田いづ実・中村このゆ（2012）経験者・当事者・関係者による摂食障害者回復支援のための
NPO 活動. 第16回日本摂食障害学会・学術集会抄録集 73.
- 塩尻智也・福田広（2005）カウンセラー志望者の志望動機について—自我同一性, 過去経験
及び進路選択からの分析— 山口大学教育学部附属研究実践総合センター研究紀要, 第19号,
103-109.
- 上野まどか（2010）カウンセラーを志望する大学院生の動機と臨床実践で感じる困難との関係
明治学院大学大学院心理学研究科 心理専攻紀要, 第15号, 9-26.
- 谷口麻起子（2011）心理療法における多重関係の問題について
聖泉大学カウンセリングセンター紀要 第2号 3-10.
- 谷口（藤本）麻起子・金網知征（2012）心理学に対する期待及び大学の専攻動機の変化
過程に関する調査研究 聖泉論叢 第20号 1-10.